

乱

RAN ⑨
麦社通信

特集・クロンシュタット叛乱

プレストからクロンシュタットへ——
革命権力と革命主体の乖離
未紹介資料・クロンシュタット叛乱の組織化
る秘密報告

紹介
す



黒の手帖

人間における遊戯と労働(3)

大沢正道

カテキズムへの回帰(2)

内村剛介

一盤散砂

玉川信明

アナキズムについてのノート

N・チョムスキー

新たな共同体論への視角

永次 健

ブルードンと現代(4)

長谷川進

スペイン革命におけるCNT(II)

ペイラツ

12号

二〇〇円(〒75)

黒の手帖社

新宿区北山伏33(大沢方)
振替 東京 102465

クロンシュタット叛乱

●イダ・メット、L・トロツキー著 湯浅越

男解説 七二〇円 反革命か第三革命か?

この不毛な対立を超えて、労働者民主主義の立場に拠るメットの労作『クロンシュタット・コミューン』にトロツキーの論考を配して過渡期ロシア一九二一年を逆照射する試み。

左翼社会革命党

1917
1921

●スタインベルグ著 松田道雄解説 三月刊

予価一〇〇〇円 最後のナロードニキ左翼エ

スエルは一〇月革命を如何に戦ったか? 赤色テロルと土地革命を基軸に展開されるレーニンの党との熾烈な攻防に不可視の『革命』を視よ。好評『左翼エスエル戦闘史』の続篇。

鹿砦社

東京都千代田区
神田駿河台3-1

電話 (293)9821
振東 16266

★小社の刊行物は、ウニタ等特定書店か直接小社へ。呈目録★

ブレストから

クロンシュタットへ

内村 剛介

三月十八日にはいやでもクロンシュタットを想い出す。忘れようもないのである。この日はパリ・コンミュンの日である。一八七一年、パリ・コンミュンのスタートした日。この日はまた一九二一年クロンシュタット叛乱の日でもある。叛乱者たちが息をのみ声を出さなくなった日。征服しつくされ、或る者はフィンランドへ逃げ、或る者は逮捕されたという日。トロツキーに「雉のように」ぶつ殺された者が大部分であった。

三月十八日を忘れずに、なぜそれを毎年想い出すのかといえ、この日が私の誕生日だからである、ということになる。私はもともとヒルミたいに押し潰され間引されてもいっこうにおかしくない御時世に胎児の形をなしてしまつたのであつたら、三月十八日は私にとって一面において潰滅に近い日であつた。他面まさにスタートの日でもあつたわけだ。「三月十八日はわしの自身の誕生日だ。だからお前のやつもそうしておいた」と亡父が言ったことがある。正確な誕生日はおそらく二月の末あたりだったのだろう。米騒動の大正時代の田舎のことだ、正確な出生届けなど誰にとつてもどうでもいいことだった。まして食ひ口がひとつ増えるだけの餓鬼の出生とあつては、ついついその誕生日さえ忘れてしまふといつたところだったろう。そのでたらめが偶然私をパリ・コンミュンに、またクロンシュタットに結びつけたことになる。

長じてこんどはスターリンにあやうく「間引き」されそうになった私は、クロンシュタットに自覚的に結びついていった。ソビエト政権とはそもそも何であるの

か。レーニンは何を喋り何を書き、じっさい何をやったのか。トロツキーは文学青年からスタートしただけにソビエト権力史のなかではむしろナロードニキの系譜にあるアナクロニズムではなかったのか。スターリンはレーニンにとつて同志ではなくて忠良な「臣・スターリン」ではなかったのか。いったいロシアでは最良の才能が要塞監獄で朽ちるようになっていたのであつて、ソビエトといえどもこのシンクスからのがれようもなかったのではないか。こういった問いをスターリンの獄が私に強制した。だから、彼の間引きをまぬがれたのちの私は、クロンシュタットを、この「ロシア才能の墓地」を、ぜひ見たいと思つていた。一九六一年、私はそれを見て「誰にロシアは住みよいか」というメモを残した。

クロンシュタットの叛乱はブレスト・リトフスクの講和につながつていゝと思ふ。一国社会主義理論はまだまださきのはなしという一九二一年のことであるにしても、クロンシュタットはトロツキーを介してブレスト・リトフスクにつながつていて、そこにすでに一国社会主義が、変節の可能性が、芽生えていたのだと思われる。ふつうスターリンが一国社会主義の提唱者・遂行者であるということになつてゐるが、そのじつこれを準備してしまつたのがトロツキーなのであつて、この両者のうちのどちらに一国社会主義論のプライオリティを与うべきかとなると、密教においてはトロツキーに、顕教においてはスターリンに、ということにでもなるのではないか。一国社会主義への変節を、その密教の秘鍵を、日本から見透していた北一輝は、一九二三年、日ソ復交の打診に招かれて訪日したヨッフエに訓戒してやるという形でこう書いてゐる。

ヨッフエ君等がブレスト・リトフスクに於ける降伏条約に調印して独逸帝国との提携を公けにするに至るまで、諸君は国内に倒すべき抗争者を持つて居た。則ち英米仏を後援とするケレンスキーと云う色男の一派だ。諸君は是等を倒す為に独逸皇帝の援助を受けた。国内の争鬭は諸君に全勝に帰した。（これ拙者共の同慶とする所である）。諸君は此勝利を国内に得たが、国外の独逸に対しては全然の降伏者となつた。——敬重するヨッフエ君。君は此の条約の時、独逸の將軍の前に直立不動の姿勢を取り一列横隊をなして最敬礼して居たさ。何でも知つてゐるだらう。其時君等の醜体無恥を憤つて自殺した諸君側の軍事委員スカロン將軍もある。——降伏者は凡ての命令に服従せねばならぬ／＼……………√諸君は独逸皇

帝陛下より今日までの戦友を敵として戦ふべきことを命令され、然して其れに悦んで服従した人………。而も如何せん敗戦の爲めに軍隊は潰滅状態に在るし、且つ戦争中止を題目としての革命であり降伏である露独提携であつたが故に、軍隊の出動を以て英米仏や日本に対することは出来なかつた。依つて諸君は別個平凡なる対敵行動に訴へて来た。英米仏伊等一切聯合國の債務全部を踏躐つて喧嘩を売つて出た。曰く聯合國に負へる債務は返金罷りならぬ。乃公に於て没収して遣わす。欲くば腕で来いと。人………。聯合國各国亦諸君の土地を差押へんが爲めに遠征の軍を動かした。腕を出して恥とせざる者に腕を出したからとて亦恥ではない。社会主義対資本主義で胡魔化してはいけないよ。諸君が敵国の財産をフンダクする時に社会主義呼ばはりすることの狼藉は、米国がメキシコの石油を狙ふに正義人道の名を用ふると等しき喧嘩の原則である。喧嘩の原則をマルクスの経済学説に結びつけて、社会主義国家は借金を踏み倒して可なりとは獸類の脳髓に於て構成さるる論法である（ヨッフエ君に訓ふる公開状）。

クロンシュタットの叛徒討伐に當つてトロツキーが古典的デマゴグとなつたことについてはベルクマン、ヴォーリン、アヴリチらの記述にくわしい。社会主義はすべての上にあつたから、叛徒らは反社会主義の徒輩でありフランスのスパイによつて組織されているということにならねば具合が悪かつた。そもそもソビエト権力は社会主義に仕えるものであり、その社会主義は必要とあらば人間の前に膝を折るべきものであるのだが、それが逆立ちして、人間が社会主義のためにあり、その社会主義は権力を握つた党に仕えるものということになつた。北一輝という喧嘩の原則が貫徹したのである。クロンシュタット討伐に際しては、権力は、もはやアナキストを引き合ひにさえ出そうとはしていない。いまだアナーキストを呼び出すのは喧嘩の原則に照して得にはならぬという計算である。レーニンは一九二一年の第一〇回党大会でアナキストに宣戦していたのであつたが、大会進行のさなかに起つたクロンシュタット叛乱について言及するに際しては、ことさらにアナキストを黙殺している。だが、この戦術的黙殺はレーニンのスタイルなのであつて現実に黙過することなどでは全くない。

——レーニンは論争に際し敵を説得しようとはしなかつた。レーニンは論争に

際しては通常論敵には向わず、その証人に向つて発言した。彼の目的は論争の証人の面前で相手を嘲笑し、恥をかかせることにあったのだ。

——地下活動とソビエト時代初期の激しい闘争という特殊な状況下に起り、一時的、偶発的なものとして括弧の外へ移されたもの——それはじつはすべて恒久的、決定的なものだったのだ。

これがまさに回想記作者が特筆しなかったレーニンの性格の細部である。これが死の床に横たわるブレハーノフの家宅を搜索せよという指令を決定したので（ソビエト作家グロスマン『万物は流転する』八一九五五〜六五年の作）から。

クロンシュタットの叛乱は、以上の引用が示す空気から明らかに察しうるように、一九六〇〜七〇年代の現代ソビエトで静かに、だが着実に言及され回想されようとしている。「静かに」というのは、パセチックではなく、また判官びいきでもなく、ということである。西独の「ツァイト」紙はソビエトの体制側の知識人さえ今日すでにブレストを論じているという（『朝日ジャーナル』七二・二・四日号『地下出版「政治日記」』）。

ブレストが論じられるということは、革命の原基が論じられるということである。何のための、誰のための革命であったかが論じられるのである。勢いのおもむくところ、クロンシュタットが日程に上る。クロンシュタットの叛徒たちはまさにそれを論じていたのだから。そう。彼らは論じたが、その論じ方は告発スタイルではなかった。「告発」スタイルは逆にデマゴグ側から彼らに対する挑発として出てきた。

戦後日本史はおのれの無罪証明のためのさもしい告発ごっここの歴史である。かえりみて他をいうスタイル、つまり、泥棒がうまく逃げおうせようとして他人を泥棒呼ばわりする、といったスタイルが戦後日本史を一貫している。このような告発の論理はクロンシュタットにはつながらぬ。判官びいきでなく静かにクロンシュタットにかかわるべきときが日本にもやって来ているようだ。今年のわが誕生日にはそれをじっくり考えてみようと思う。

（一九七二・二・六）

革命主体と革命権力の乖離

— クロンシュタット小論 —

蓮台寺 晋

1

「ソヴェト社会主義連邦」——これが、今日のロシア国家の正式名称である。

「ソヴェト」を「ソビエト」と書くのが、「ソヴィエト」と書くのが、日本文の表記の上の相違であって、ロシア語では、 COBET であることに変わりはない（厳密に言えば、国名の場合は、その形容詞形だが）。一七年革命の輝かしきスローガン、 COBET の権力をソヴェトへ、の「ソヴェト」と同じ COBET なのである。

いうまでもなく、今日のロシアに、○五年ないし一七年と同じ意味でのソヴェト、つまり、革命大衆の自己権力としてのソヴェトは、まったく存在しない。革命大衆に対する抑圧機関としての「ソヴェト国家」が存在するだけである。『国家と革命』において、レーニンは、社会主義＝共産主義の第一段階では、「ブルジョアジーなきブルジョア国家」が残存すると述べているが、現実には「ソヴェトなきソヴェト国家」が出現し、「革命」の仮面をつけた反革命として、死滅するどころかますます肥大化し、スターリニズム体制として確立されたのであった。

もっとも「ソヴェトなきソヴェト国家」という表現には、重大な陥穽が隠されていることに留意しなければならない。多くの場合、ア・ブリオリとはいわぬまでも、暗黙のうちに（『国家と革命』に依拠して）「ソヴェト国家」を前提としているからである。

「ソヴェト国家」の枠内で、ソヴェトの有無が問題となるのではない。「ソヴェト国家」は前提たりえない。何故なら、ソヴェトを形骸化し、粉砕し、解体したのがほかならぬ「ソヴェト国家」であり、また、それによって「ソヴェト国家」が確

立されたのである。実体としてはポリシェヴィキが、同じC O B E Tという言葉を用いながら、ソヴェトを圧殺し「ソヴェト国家」を確立したのであった。

ところで現代においては、「言葉が古くなってしまったので、もうソヴェト」という言葉は口にされない」しかし、それにもかかわらず、五月革命の最中にソヴァージョが述べたように、個々人の全的解放を希求する限り「まさに委員会の自治管理をともなったソヴェトが問題なのだ」とすれば、我々は、むしろソヴェトと「ソヴェト国家」の拮抗関係における両者の変質を通して「ソヴェト国家」そのものを問わねばならないのである。

ここでは、このような視点からクロンシュタット叛乱について、できる限り具体的にみることにしたい。

△クロンシュタット△こそ、ソヴェトと「ソヴェト国家」の本質的な乖離の最初の、それ故、悲劇的かつ予兆的な激発であり、五十年後の今日、我々があらためて把え返すべき多くの重要な問題がそこに提起されていたのだから。

2

ペトログラードのストライキ運動を直接的契機とした、ソヴェトの叛乱であるクロンシュタット叛乱に対し、ペトログラード・ソヴェトはどう対処したのか？

一九二一年三月四日、ペトログラード・ソヴェト議長であり、二月二四日以来戒厳令下のペトログラード防衛委員会議長となつたジノヴィエフは、クロンシュタットを主要議題とするペトログラード・ソヴェト特別会議を召集している。クロンシュタット叛乱に対するポリシェヴィキの攻撃が開始される三日前のことであつた。

この会議には、通常のソヴェト代議員のほかに、労組、工場委員会、軍隊、青年組織の代表を招かれ、ジノヴィエフと親しかつたアナキストのアレクサンダー・ベルクマン、エマ・ゴールドマンも出席していた。ベルクマンの日記には、その時の模様が次のように書かれている。

「三月四日、——夜更け。タヴリダ宮のペトロ・ソヴェト特別会議は、熱狂的かつ不寛容な、多くは青年の、共産党員でいっぱいだった。特別券による許可——プロブスク（通行許可証）も外出禁止時間後に帰宅するために確保しなければならなかつた。職場、労務委員会の代表たちは、党員が中央の座席を占めていたので、傍聴席にいた。若干の工場代表には代議員席が与えられていたが、彼らが意見を述

べようとする、大声でかき消されていた。ジノヴィエフは、反対派の意見を聞くように再三勸言したが、彼のアピールには力も自信もなかった。

制憲會議に賛成する意見はひとつもなかった。一人の製粉労働者が、寒さに震え飢えている労働者の不満を真剣に考えるように政府に訴えた。ジノヴィエフは、ストライキ参加者はソヴェト体制の敵であると答えた。カリーニンは、クロンシュタットをコズロフスキー將軍の陰謀の本營であると宣言した。ある水兵は、レーニンとジノヴィエフが反革命者としてケレンスキーによって追及されていたこと、そして、今、彼らが裏切者と弾劾した水兵によって助けられたことを、想起させた。クロンシュタットは公正な選挙を要求しているだけなのである、と彼は説明した。彼は発言を続けることが許されなかった。ジノヴィエフの代理、イエヴダキモフの大声と熱烈なアピールが黨員を興奮の極みまで煽った。彼の決議が、無党派の代議員と労働者の抗議の嵐のなかで通過した。決議は、クロンシュタットをソヴェト体制に対する反革命的企てとして断罪し、即時降伏を要求していた。宣戦布告である。」

『ボリシエヴィキの神話』

大衆組織としてのソヴェトの内実がいかなるものか、おおよその見当はつけられよう。ちなみに、ヴィクトル・セルジュは、二〇年末を回想した文中で「わたしはペトログラードのある地区で討論に参加したが、レーニンおよびジノヴィエフの△多数派▽が投票をごまかしているのを知って愕然とした」と述べている。『一革命家の回想』

しかも、労働者には真実が伝えられず、コズロフスキー將軍によるクロンシュタット奪取というデマが意図的に流されていた。再びセルジュに語らせよう。「真実がじょじょに時の経つにつれて、新聞の煙幕を通して文字通り虚言のなから溢れるように滲透した。これがわれわれの新聞であったとは、われらの革命の新聞、社会主義者の世界でもっともすぐれた新聞、廉潔で公正な新聞であったとは、なんということであろう……」

このような情況のなかでボリシエヴィキは、何を理由に、クロンシュタットを反革命と決めつけたのか？ この点に関してベルクマンは、他の小冊子『クロンシュタットの叛逆』で同じ會議のことを、次のように証言している。

「ペトログラード・ソヴェトの議長として、ジノヴィエフが開会を宣言し、クロンシュタットの情況について、長い演説をした。じつをいえば、私はどちらかとい

うとジノヴィエフ的視點に賛成して集会にやつてきたのだった。つまり、私は、クロンシュタットにおける反革命の影響の漠然たる可能性を警戒していたのである。だが、ジノヴィエフの演説自体が、水兵達に対する共産党の弾劾が真実のかけらもない、全くの捏造であることを、私に確信させた。私はジノヴィエフの演説を以前に何度も聴いたことがあった。前提さえ承認されれば、彼は説得力のある演説家だった。しかし、今の彼の全体的態度、議論、調子、身振り——すべてが、彼の言葉が偽りであることを示していた。私には、彼の良心が抗っていることさえ感じられたのである。クロンシュタットに対してあげられた唯一の「証拠」はかの三月一日の決議であるが、その要求は正当かつ穩健でさえあった。しかも、運命の一步を踏み出したのは、水兵に対する激烈な、ほとんどヒステリックでさえある弾劾を伴ったカリニンの報告に基づくものであった。……」

唯一の「証拠」とされた三月一日の決議は、クロンシュタット叛乱の政治的綱領とみなされるものであり、叛乱の質を判定する重要な指標であることは確かである。問題は、この決議がジノヴィエフやカリニンの主張するように、メニシェヴィキやエスエルないし協商国側のスパイに教唆された自衛軍の陰謀を裏付けるものか、それとも、ベルクマンのいうように、「正当かつ穩健でさえある」ものなのか、いずれにせよ、決議を具体的に、一九二一年のロシアというコンテクストのなかで、検討しなければなるまい。

3

すでに述べたように、クロンシュタット叛乱は、ペトログラード労働者のストライキ運動を直接的契機とするものであった。

二月三日、トルボチヌイ工場に端を発したストライキ運動は、食糧徴発の終結、道路封鎖隊の撤退、特権的配給の廃止、物々交換の許可等の経済的要求を掲げ、ペトログラードを席捲し、一部では、言論、出版の自由、労働者政治犯の釈放等のより政治的要求も提出していた。連日、デモンストレーションが繰返され、二八日には、ついに大ブチロフ工場六〇〇〇人が参加し、二月革命当時の雰囲気を感じていたという。しかも、これは、ペトログラードばかりではなく、モスクワその他にもほぼ同時にみられる構造的なもので、農村の収奪政策と党独裁を根底とする戦時共産主義の破綻が、農村のみならず、都市にまで押し寄せ、もはやおおうべく

もないことを示していたのである。

これに対し、ポリシェヴィキは、二月二四日、ペトログラードに防衛トロイカを設置し、直ちに戒厳令を施行してペトログラードを軍事基地化した。さらにロツクアウト、一五〇〇名に及ぶ逮捕を強行し、逆プロバガンダを進めるとともに肉の配給、道路封鎖隊の撤退等、若干の譲歩も忘れず、表面的には鎮圧に成功したのであった。ペトログラードの労働者はあまりに疲れており、武力の前に屈服し、反革命よりはましなポリシェヴィキを、しかたなく選んだのである。

だが、ペトログラードのストライキ運動の影響は決して小さくなかった。ペトログラードの西方約二十キロのコトリン島の要塞、クロンシュタットの水兵たちは、当然にも、ペトログラードのストライキ運動の動向に重大な関心を有していたのである。

二月二六日、戦艦ペトロバブロフスクとセヴァストポリの乗組員が緊急集会を開き、ペトログラードでながら起きているのかを知るために代表を派遣した。

彼らは、〇五年革命以来、ペトログラードの労働者と革命的連帯の伝統を共有していたのだった。代表たちは、ペトログラードの多くの工場を訪れ労働者と接触し、二八日、クロンシュタットに帰ってペトロバブロフスク乗組員集会で報告を行った。報告は、ストライキ参加者への共感を表明し、より大きな自己決定権を求めるものであった。この報告を受けて、集会は次のような決議を採択した。

(1) ソヴェト再選挙の即時実施。現在のソヴェトは、もはや労働者と農民の意思を表現していない。この再選挙は、自由な選挙運動のうちに、秘密投票によって行われるべきである。

(2) 労働者と農民、アナキストおよび左翼社会主義諸政党の言論と出版の自由。

(3) 労働組合と農民組織の集会結社の権利およびその自由。

(4) 遅くとも一九二一年三月一〇日までに、ペトログラード市、クロンシュタットおよびペトログラード地区の労働者、赤軍兵士、水兵による非党的協議会の召集。

(5) 社会主義諸政党の政治犯、および労働運動と農民運動に関連して投獄されている労働者、農民、兵士、水兵の釈放。

(6) 監獄および強制収容所に拘束されているすべての者に関する真相を再調査

するための委員会の選出。

(7) 軍隊におけるすべての政治部の廃止。いかなる政党も自らの政治理念の宣伝に関して特権を有すべきでなく、また、この目的のために国庫補助金を受けるべきでない。政治部の代りに、国家からの資金援助でさまざまな文化的グループが設置されるべきである。

(8) 都市と地方の境界に配備されている道路封鎖隊の即時廃止。

(9) 危険な職種および健康を害する職種に就いている者を除く、全労働者への食糧配給の平等化。

(10) すべての軍隊における党員選抜突撃隊の廃止。工場や企業における党員防衛隊の廃止。こうした防衛隊が必要な場合は、軍隊の場合は兵卒、工場の場合は労働者の意向で任命すること。

(11) 自ら働き、賃労働を雇用しないという条件の下での、農民の自己の土地での完全な行動の自由と家畜を飼育する権利の承認。

(12) われわれは、全軍の部隊ならびに士官学校生の関心が、この決議を支持することを望んでいる。

(13) この決議が正当な扱いの下に印刷、公表されること。

(14) 移動労働者管理委員会の設置。

(15) 賃労働を使用しないという条件の下での、手工等生産の認可。

この決議は、翌三月一日の水兵、兵士、労働者、約一万五千の大衆集会でも確認され、「クロンシュタットの政治的綱領」(メット)とされるのである。——これがジノヴィエフらによつて「反革命の証拠」とされた三月一日の決議内容にほかならない。

決議の内容は、当面の経済的要求とその他の二つに、ひとまず大別することができよう。

前者に関し、水兵たちは彼らだけの要求ではなく、労働者および農民の具体的要求を掲げていた。水兵たちは、帰郷の際に農村の疲弊を目のあたりにし、また、都市の労働者の実状をよく知っていたからである。

とはいえ、これら要求は、なんら原理的なものではなく、究極的なものでもなかった。ただ、戦時共産主義政策の破綻によつて、あるいは戦時共産主義そのものに打ちひしがれたロシア民衆の、素朴な実感に裏付けられたぎりぎりの要求であつ

た。それは、ある面では、ネップの先取りであり、その限りで、ポリシエヴィキ政府も受け容れうるものであったと思われる。実際、第八項などは、ジノヴィエフがペトログラードでまさに許可しようとしていたものであった。(ただし、これらの経済的要求がすべてネップによって満たされたものではまったくない。なるほどネップによって、食糧徴発は終り、道路封鎖隊は撤退し、労働突撃隊は解散され、組合は国家から一定の独立性を確保した。だが、国营農場はそのままであり、一部では資本主義が復活した。ネップは、戦時共産主義の破綻を根底的に乗りこえるものではなく、まさにブルジョアの譲歩の糊塗策として、一応民衆の不満をそらしはしたもののクロンシュタットの要求にみられる平等主義的、プロレタリア民主主義的方向とは逆に、管理者および専門技術者をのさばらせ、労働者を再び賃労働者の方向へ引戻したのである。)

ポリシエヴィキ政府が絶対に許容できなかったのは、経済要求以外の項目、とりわけ第一項、およびそれに必然的に附随する二、六項であった。これを、ベルクマンは「正当かつ穏当なものでさえある」といい、ポリシエヴィキは「反革命」と決めつけたのである。

4

同じ革命を共に闘い取ってきた者の間に、なぜ、このような立場の相違が現われてきたのか？ いや、単なる立場の相違ではなく、相違を認めあうことのできぬ非和解的敵対関係が生じたのか？

もっとも、共産党員のなかにさえ、三月四日のペトロ・ソヴェトの決議が実行されるとは信じられなかった者が、大勢いたといわれるし、ベルクマンやセルジュが調停を試みたことも事実である。事態は急を告げていたが、必ずしも誰の目にも明らかかなものではなかった。それは、ポリシエヴィキにとってもクロンシュタットの水兵にとっても、最初は同様であった。

ペトロ・パブロフスクの決議が通過した翌日、すなわち、三月一日に、船広場で開かれた大衆集会に、ポリシエヴィキは、全露ソヴェト執行委員会議長カリニンとバルチック艦隊政治委員クズミンを派遣しているのである。この時点までは、ポリシエヴィキも水兵を説得するつもりであり、工場労働者出身で、労働者に人気のあるカリニンを送りこんだのであった。実際、彼らは榮譽礼で迎えられ、友好的

霧囲気のなかで集会は始められたのである。しかし、それにもかかわらず、三月一日の決議は可決されたのである。(他方、クロンシュタットの水兵たちが非攻撃的だったことは、いくらでも例証できる。彼らは、カリーニンを無事に返し、臨時革命委成立後も、防衛以上のことは考えていなかった。)

その直後に、ポリシエヴィキ政府はクロンシュタットを白衛軍の陰謀と決めつけ、三月七日には武力攻撃を開始し、武力ばかりではなく、デマ、人質の逮捕、赤軍再編、さらには投降者へのチェカによる報復虐殺を含め、あらゆる手段を用いてクロンシュタットを文字通り壊滅することに踏み切ったのである。ここには、明らかに飛躍が認められよう。

この飛躍を、ポリシエヴィキ側は、しばしば外在的要因によって説明しようとする。すなわち、クロンシュタットはその主観的意図とは無関係に、客観的に反革命の危険をもたらしていた、云々。しかし、この弁明は、責任逃れにはなっても、飛躍の根拠を納得させるものではない。なぜなら、ポリシエヴィキ政府には、もう一つの途——クロンシュタット決議を真摯に検討し、要求に応えること——が残されていたからである。換言すれば、「現在のソヴェトは、もはや労働者と農民の意思を反映していない」ことを自ら認めることである。

だが、ポリシエヴィキは、クロンシュタットの要求を否認し、それによって、クロンシュタットの事実認識の正しさを、ネガティヴな形で裏づけたのである。クロンシュタットの精神は、ベルクマンのいうように、ソヴェト主義者の精神で一貫していた。彼らの要求は、十月革命の要求にはかならなかった。ソヴェトの連合によるソヴェト政府が、ソヴェトを離れて自己運動を展開しはじめたのである。ポリシエヴィキ内部にも、クロンシュタットの要求と部分的に共通の声がなかった訳ではない。だが、それはまさしく党内論争であり、真に革命大衆のレヴェルで解決が追求されたのではなかった。クロンシュタットは、その枠外でソヴェトを再生させ、それ故に壊滅させられたのである。

結論を急ごう。ポリシエヴィキには、革命主体と革命権力の乖離の自覚がまったく欠けていた。論理の上で、革命主体イコール革命権力と短絡し、事実の上で、その回路を党が独占したとき、「人民」の名による人民の抑圧、「革命」の名による革命の圧殺が始まった。ソヴェト権力と国家権力の短絡が革命の豊かな可能性を自ら奪い去ったのである。

知られざる革命

ヴォーリン 著
野田茂徳 他 訳

ロシア革命時のアナルコ・サンジカリスト、ヴォーリンの同名の原著の第三部分をなす本書は、クロンシュタット叛乱およびマフノ運動を扱い、多くの資料を駆使し、著者の体験を加えて、それらの総括を行なっている。クロンシュタットの総括に関しては「クロンシュタットは正しい道を照らす輝かしいいまつであつた。反徒たちは権力という言葉や思想を追放して共同や組織化や管理のことについて話すのではなく、彼らの環境のなかではいまだに権力（ソヴィエトの権力）のことについて語っていたが、それは大した問題ではない。それは過去へ払った最後の貢物であつた。ひとたび労働者大衆自身の手で言論と組織と行動の完全な自由が勝ち取られれば、ひとたび独立人民の活動が見いだされれば、あとは自発的に自然にやってくるであらう」と述べている。このように、基本的立場はきわめて古典的であるが、『クロンシュタット・イズベスチア』からの豊富な引用等、資料的に貴重なものがある。

（現代思潮社 六五〇円）

クロンシュタットの叛逆

ベルクマン 著
小池英三 訳

一九二三年という最も早い時期になされたクロンシュタット叛乱の簡潔な紹介と総括の書。著者のベルクマンは、当時、ペトログラード在住のアナキストで叛乱の際には、セルジュラとともに調停を試みており、本書にも彼自身が直接見聞したものが少なからず含まれている。小冊子ながら、ヴォーリンとは若干ニュアンスが異なり、叛乱の本質をソヴェト主義として背定的にとらえ、軍事的総括も行なうなど、今日なお読むに値する重要なものといえよう。ただ、翻訳は戦前のものがそのまま使われており、改訳が望まれる。

（表社 二〇〇円）

クロンシュタット叛乱

イダ・メット 他 著
蒼野和人 他 訳

本書は、イダ・メット『クロンシュタット・コミューン』およびトロツキーのク

ロンシュタット関係の小論三編に、湯浅赳男の解説「ロシア革命における一九二一年」を付したものである。

メットの論文は、クロンシュタット以後のロシアの変質、三〇年代にトロツキ、ベルクマン、セルジュ等の間で交された論争を踏まえ、実証的に展開された説得力のある好論文であり、トロツキーの小論は彼女によって反論の余地なく批判されている。しかしながら、クロンシュタットの総括から引き出された結論は、四十年代という時代を反映してか、少し印象が弱い。

湯浅の解説は、トロツキズムの立場からのクロンシュタット論の手直しとして興味深いが、事実関係を認めただけで、基本的には、同一の党派的枠組みのなかで政治的力関係による視点の移動を行なったものにすぎないといえよう。

(鹿砦社 七二〇円)

前記三冊はクロンシュタット関係文献の必読書とでもいうべきものであるが、他に、レーニン全集、セルジュの回想録(『母なるロシアを求めて』現代思潮社七五〇円)も重要であろう。また、背景を理解するには、アヴリッチ『ロシア・アナキズム全史』(合同出版 九五〇円)も役に立つ。

邦訳はないが、ベルクマン『ポリシエヴィズムの神話』、ゴールドマンの自叙伝も興味深い。さらに、おびただしい資料を駆使し、多角的に扱えたアカデミズムからの労作、アヴリッチ『クロンシュタット一九二一年』が刊行されており、邦訳が望まれる。

(P)

秋山 清 著
大沢 正道

「幸徳・大杉・石川」

—日本アナキストの原像—

大新聞Aの書評委員会で、推センはあったものの幸徳、大杉についてはすでに浩瀚な研究書が出ているし、珍らしいのは石川のみということで、書評掲載は見送り

になったそうである。しかしこのうち大杉については確かに大沢自身の大著があつていいとしても、幸徳については不満である。これまで幸徳の研究書は出たにしろ、誰が秋山ほど実証的に幸徳の核心部分をなすアナキズムに触れたことがあつたか？幸徳らの大逆事件は明治における社会的、歴史的事件の真の原因であり、彼のアナキズムについても誰も身を入れて突っ込んだものがないではないか。

石川三四郎については、評論集『虚無の靈光』（三一書房）における解説（秋山）以外には、石川を論じてこれ程に要領を得たものは大沢以外にはなかった。しかも現今の状況において、石川の土民思想を軸とする思想展開は重要な意味を持っているといわねばならない。今日の思想を開発するに足る一つのテコがそこにあると思えるのである。

以上のようなことで、やはりこの書は日本のアナキズムの史的水準を知るに足る書であると同時に、日本のアナキズム思想史の骨組を示すものとして、確固たる地位の与えらるべき書であるといえるのである。

（玉川 信明）

（高山市総曲輪四ノ一四、北日本出版九二〇円）

Ⅱ I W T 労働相談 Ⅱ

東京地区一般合同労組（I W T）は、体制からも「反体制」からも疎外された未組織・臨時労働者を中心に自立的連合的運動を模索的に追求しているが、活動の一環として、労働相談日を設定し、労働者の直面する諸問題を共に考え、革命的解決を追求している。闘う労働者の相互交流、連合の一契機として、積極的利用を！

I W T

日時 毎週金曜日 夜六—八時 場所 麦社（目白または池袋下車。T E

L 九八七—五七六五）

「クロンシュタット」による

三つの作品

黒色戦線（第一次）の第一巻第七号（昭和四年十二月一日発行）の巻頭に「一九二一年の婦人労働祭」という中編小説がある。作者は八木秋子、といっても現在では知る人も少いだろう。この中編小説は「クロンシュタットの事件」によってわが国でもっとも早くかかれた文芸作品で、約百四十枚くらいのものである。この「一九二一年の婦人労働祭」というのは、クロンシュタットの水兵たちがボルシェヴィキと対立をばげしくし、そのクロンシュタットの街に赤軍から第一弾が打込まれたときが、ちょうど三月八日であつて、クロンシュタットの街は切迫した情勢の下で婦人労働祭を始めたところだった、ということに因んで、この題がつけられたのである。

八木秋子はどこからこの小説の材料を入手したのか、その頃私どもは小池英三訳、ベルクマン著の『クロンシュタットの反逆』というパンフを読んでいたばかりだった。この小説を読んだとき、はじめて目に見えるようにクロンシュタットがソビエト政府に反逆してゆく過程が描かれていて、私たちを感動させた。クロンシュタットの動向を実際にどうとらえ、十分にそれを表現し得たか否かということよりも、私どもが皆目知らなかったといつてもいいこの事件が物語りとして描き出されたことに、感動したのである。後の赤軍の將軍トハチエフスキーやトロツキー、ジノヴィエフ、ルイコフ、などの登場は、生きた印象だった。この小説の最後は次のように結ばれている。

「一九二四年レーニンの死んだ直後、新々経済政策を発表して、内外のブルジョアジーと野合し、社会主義軌道から益々はなれてゆく。

クロンシュタットの人々はアルハンゲルやトルキスタンの牢獄で殺され、ウクライナのマフノは巴里に通れて、一九二九年、重い病氣にかかっている。だが、それらの精神と事業は、春をまつ草の根のように、その妻や、子供や、孫にひろがってやがて双方の芽を土の上に現すのだ。

ミーシャやナターシャ、あの一九二一・三・八の婦人労働祭に登場した女性た

ちは、いまだここに？　そして何かをしているだろう。」

今年はこの小説が出てから四十三年目である。作者の八木秋子はこの小説をかけた年(昭4)、『女人芸術』紙上で、女だけのアナ・ボル論争酣なその只中にあって高群逸枝や松本正枝らとともにげんげしい筆陣を張っていたが、それから三、四年後に起った農村青年社事件の中心の一人であった。その事件は戦前最後に耳目を集めたアナキストの事件として、最近その全貌が関係者や研究者の手で明らかにされようとしているものである。八木秋子氏は東京の清瀬に在住、健在である。

解放劇場が昭和二年、三年の劇団解放座の後をうけて「サッコ、パンゼッチ」事件を描いた小説『ボストン』(アプトン・シンクレア作)を脚色し築地小劇場で上演したのは昭和六年二月七、八日のことであった。このときの成功につづいてすぐ企画されたのが「クロンシュタット」の事件を芝居に書いて上演しようということであった。その年の秋に、という目安で飯田豊二の手でその準備にかかったが、彼は二幕くらいまで書いたところで下りてしまった。それは劇などというものがアナキストの革命と何の関係があるか、というような、また革命的上演とは劇場で観客に芝居を見せることか、などという反対的な意見が劇団の内外に起り、わけても外からの圧力が強かったことにイヤ氣がさして、この有能な脚色者、演出家が身をひいてしまい、止むなく素人の局清が、五幕十場の『クロンシュタットの敗北』というのを書き上げた。そして警視庁の検閲課に上演台本として提出したところ、見事に上演禁止となった。その理由は「赤色国家のことといえども軍隊と市民が政府に反逆するという芝居の上演はまかりならぬ」という、はっきりした理由であった。付言すれば、この劇の筋書は、前記八木秋子の小説によるところが大きかった。ガリ版の、陽の目を見なかったこの戯曲は、探せばまだどこに残っているかもしれない。

また昭和九年の自由連合新聞に「クロンシュタット」という詩が発表されたことがある。六、七十行の長い詩で作者は局清であった。

その後のこの詩は筆者も見失っていたが、戦後近藤憲二によって発見され、多少筆を加えてガリ版詩集『豚と雞』(昭和43年)に収められ、さらに『秋山清詩集』(昭和43年)に「クロンシュタットの敗北」の題で収録されている。

(クロンシュタットにかかわる詩はまだありそうに思われるが、急のことで今ははっきりしていない。)

編集部より 以下に紹介する資料は“Dokladnaja zapiska po voprosu ob organizatsii vosstanija v Kronshade”（ロシア大学ロシア資料室蔵）の、アヴリッチによる英訳（『クロンシュタット一九二一年』付録）からの重訳である。この報告書は叛乱以前に、カデット系のスバイによって書かれたものであり、そのまま鵜呑みにはできないが、当時の状況を「独自の立場」から具体的に把握し問題提起を行なっている点で、十分検討に値するものと考え、あえて掲載することにした。問題点については、解説を参照してもらいたい。

未紹介資料

クロンシュタットにおける蜂起の

組織化問題に関する秘密報告書

極 秘

一九二一年

クロンシュタットから流れてくる情報によって、この春の間にクロンシュタットに暴動が勃発するであろうと信じざるをえない。もしその準備にどこか外からの支援があれば、叛乱は確実に成功することを当てにできるであろう。また、それに向けて、引き続き好ましい情況が存在するであろう。

現在、いまだに軍事的な重要性を持ち続けているバルチック艦隊の全戦艦は、クロンシュタット港に結集している。それ故に、クロンシュタットにおける主たる軍勢力は、陸上でクロンシュタット要塞を防備している水兵達と同程度にその戦闘的な戦艦の水兵達に依存している。全軍勢力は、コミュニストの水兵の小部隊（地方ソヴィエト、チュカ、革命法廷、艦船の政治委員・黨員集団、等）の手に集中されている。残りの守備隊とクロンシュタットの労働者は重要な役割を果たしていない。一方では、水兵の間に現存秩序への多くの明白な不満の徴候が認められる。水兵達

は、ひとたび、諸個人の小グループが、迅速かつ断固たる行動によってクロンシュタットの権力を握れば、異議なく叛徒の戦列に加わるであろう。水兵のあいだでは、そのような部隊がすでに形成されており、精力的な行動に移ることが可能であり用意ができています。

ソヴィエト政府は、クロンシュタットの水兵の敵対的態度について十分に知っている。それについて、彼らはクロンシュタットにおいては、一時に一週間分以下の食糧供給でさえも困難であろうとみなしている。ところが、これまでにクロンシュタットの倉庫にはほとんど一ヶ月分の食糧が輸送されたことがあった。ソヴィエト政府にとって、水兵に対する不信がきわめて大きく、赤軍の歩兵連隊は、現在フィンランド湾をおおっている氷を横断してクロンシュタットに到る道路の警備を命ぜられている。しかし、蜂起の際には、この連隊は叛乱兵に対してなら決定的な敵対行為をなしえないであろう。何故なら、もし叛乱が正しく準備されれば、連隊は水兵によって奇襲をかけられるであろうからである。

全艦隊とクロンシュタットの全要塞との主導権の奪取によって、コトリン島のすぐ付近にはない他の全ての要塞も、叛乱の支配下におくことが確実になろう。それらの要塞には、クロンシュタットに向けて砲撃することが不可能であるような角度の砲台が取り付けられており、一方、クロンシュタットの砲列はその要塞に向けて発射することができるのである。（オブルーチェフ要塞は、一九一九年の五月の暴動の際にクロンシュタットの砲台が発砲して半時間の後に屈服した）

叛乱が開始された直後に、予想され得る唯一の軍事的抵抗は、ボルシエビキがクラスナヤ・ゴルカ（フィンランド湾の南海岸本土に位置する要塞）の砲台からクロンシュタットに発砲してくることであろう。しかしながら、クラスナヤ・ゴルカの大砲はクロンシュタットの砲台と戦艦の大砲とによってほとんど無力にされてしまっている。クロンシュタットにいる戦艦には、少なくとも、12インチ砲三二門と8インチ砲八門（小口径の銃砲は数えていない、これについては信頼すべき情報がないのである）が搭載されている。しかし、クラスナヤ・ゴルカ要塞には12インチ砲八門と8インチ砲四門の大砲しかなく、その他の砲台は、クロンシュタットに損害を与えるためには口径が小さすぎる。そのうえ、クロンシュタット、クラスナヤ・ゴルカ、そしてバルチック艦隊の補給用砲弾のほとんどは、クロンシュタットの火薬庫に貯蔵されているのだから、叛乱軍の手中におかれるであろう。それ故、ボルシエ

ビキ側は、クラスナヤ・ゴルカからの砲撃によつてクロンシュタットの蜂起を鎮圧することはできないであらう。逆に、誰もが、クラスナヤ・ゴルカとクロンシュタットの間で砲撃戦が起つた場合には、後者が勝つことを予想するに違いない。(一九一九年五月の蜂起には、そこにあるすべての建物が崩壊してしまつた四時間ばかりの砲撃の後にクロンシュタットに屈した。——ボルシェビキはといえば、彼らは、後の使用のために保存すべく直ちにクラスナヤ・ゴルカへの発砲を禁じた。)

上述のことからして、クロンシュタット叛乱の成功のために、次のようなきわめて好都合な情況が存在することは明白である。(1)蜂起のために、きわめて緊密に結合した精力的な組織者が存在すること。(2)水兵のあいだの叛乱へ向かう共通の傾向があること。(3)小地域での軍事的行動は、クロンシュタットの狭い地形によつて限定され、それは全般的な叛乱の成功を保障するであらうということ。(4)クロンシュタットが地理的にロシアと隔てられていることと水兵の間の同質性と連帯によつて、蜂起の準備が全くの秘密の裡になされる可能性があること。

かりに叛乱が成功すれば、ボルシェビキにはクロンシュタットの外部に戦闘体制にある戦艦もなく、またクロンシュタット砲台を完全に制圧するのに十分な力をもつた陸上の大砲を集中する可能性ももっていないので(特にクラスナヤ・ゴルカ要塞が叛徒に対して使いものにならないために)、陸地からの砲撃ないしそれと呼応した軍隊の上陸による奇襲によつて、クロンシュタットを奪還することは不可能であらう。(注1)

以上のことから、蜂起に引き続く軍事的情況は全く有利であり、基地は必要な期間もちこたえることができるであらう。

しかしながら叛乱後の内部の生活状態がクロンシュタットにとつて致命的であることが判明するかもしれない。食糧は、叛乱後数日分しかないのである。もし、蜂起の直後に援助されなければ、或いはもしクロンシュタットに対する今後の救援が明確に保障されなければ、飢えが不可避免的にクロンシュタットを襲い、その結果、再びボルシェビキ権力の下に屈服することを強いられるであらう。ロシアの反ボルシェビキ的組織は、この食糧問題を解決できるほど強力ではなく、やむなくフランス政府へ援助を求めているのである。

叛乱の直後におけるクロンシュタットへの食糧補給の遅れを避けるためには、指定された時間以前に、十分に用意された食糧がバルチック海に入つてクロンシュタ

ットへの進行の指令を待っている輸送艦に積みこまれているなければならないであらう。

クロンシュタットがボルシェビキに屈服する場合は別にして、もし食糧が支給されないとするなら、叛乱軍のあいだで士気が乱れる危険性が生じ、その結果クロンシュタットにおけるボルシェビキの権力は復活することになろう。叛乱を起した水兵たちが外部から、とりわけウランゲリ將軍指揮のロシア軍から、共感と支持の保障を受けなければ、また、水兵たちがロシアのソヴィエト権力の転覆に向けて叛乱を自ら発展させることは不可能だと感じ、ロシアの他の部分から孤絶していると感じたならば、そうした士気沮喪は不可避となろう。

この点について、きわめて望ましいのは、暴動が勃発した後、できるだけ短期間のうちに数隻のフランスの軍艦がフランスの支援の象徴としてクロンシュタットに駆けつけることであらう。ロシア軍の連隊がクロンシュタットに到着すればさらに望ましい。その連隊を選ぶとすれば、現在ビゼルテに駐留しているロシア黒海艦隊が選ばれるべきである。というのは、黒海の水兵たちがバルチック艦隊の水兵の支援に到着すれば、後者の間に未曾有の興奮をまき起すに違いないのだから。

われわれはまた、クロンシュタットでは、とりわけ蜂起後最初の一日は、叛乱軍の整然とした組織性を期待することはできない。これに関し、ウランゲリ將軍の指揮下にあるロシア陸軍、或いは艦隊が到着するなら、きわめて有益な結果がもたらされるであらう、また、それ故に、クロンシュタットでの全ての指揮権は自然にこれらの連隊の上級士官にゆだねられるであらうと思われる。

さらにまた、クロンシュタットからソヴィエト政府を打倒するための軍事作戦がなされるときにも、その目的のためにウランゲリ將軍の武装したロシア兵の急派は必要であらう。このことに関して、この軍事作戦のために——あるいは、たんなるそうした軍事作戦をとるという威嚇のために——クロンシュタットは不落の要塞として役立つであらう。

クロンシュタットに最も近い攻撃の対象は、無防備のペトログラードであるが、もしそこを攻略すれば、ボルシェビキとの戦闘の半分までは勝利したことを意味しよう。クロンシュタットからの、ソヴィエト政府に対するそれ以上の作戦展開が、何らかの理由によってまもなく望みえなくなることになっても、クロンシュタットが、フランス政府と提携して戦いながら、反ボルシェビキ連隊で要塞と化せられた

ということとは、それでも、この春のヨーロッパの全般的な軍事的政治的情況の展開にきわめて重大な意義をもつであらう。

だが、クロンシュタット叛乱の最初の成功が、食糧が十分に補給されなかったり、バルチック艦隊水兵やクロンシュタット守備兵の士気が規律と軍事的支援の不十分さによって低下したりして中断させられるなら、ソヴィエト権力は弱められるどころか、さらに強化され、そのうえ、その敵対者は不信を買うであらう。

こうしたことを考えるならば、ロシアの反ボルシェビキ組織は、とくに次の諸点についてフランス政府が適切な措置を取ることを決定するという完全な保障を得ることができないなら、クロンシュタット叛乱の成功に資することを控え、態度を保留するであらうと思われる。(1)蜂起の準備のために、好ましい結果を得るために最小限のおよそ二十万フランの軍資金の支援を引き受けること。(2)叛乱が遂行された後も、さらにクロンシュタットへ資金を融資することを引き受けること。(3)クロンシュタットへ食糧を補給するために行動を起し、さらに、クロンシュタットでの叛乱が完遂された直後に、最初の食糧配給を到着させることを保障すること。(4)フランス軍艦、およびウランゲリ將軍の軍隊からの陸海軍部隊の、叛乱以後のクロンシュタット到着に関する協定を宣言すること。

以上に関連して、次のことを忘れてはならない。すなわち、もしフランス政府とロシアの反ボルシェビキ組織が叛乱の準備とその指揮に参加しなくとも、クロンシュタットでは春の間に蜂起が起きるであらうが、しかし、その場合それは短期間の成功の後に、失敗すべく運命づけられていることである。そしてその失敗は、ソヴィエト権力の威光をきわめて強大にし、それに敵対する側から、クロンシュタットを奪取し、ボルシェビキに回復不能の深刻な打撃を加える、きわめて稀な機会——たぶん二度とない機会であらう——を奪い去るであらう。

フランス政府が以上の考察に原則的に同意するのなら、叛乱の組織者の代表たちとこの問題についてより詳細な協定を取決め、蜂起ならびにそれ以後の計画、また組織化とその後の蜂起の財政的側面に必要な資金のより詳細な情報についても話合ふことのできる、個人を指名することが望ましい。

(田原和郎訳)

注1 報告書の著者は、蜂起が氷が解けた後に起ることを仮定している。(アヴリッチ)

謀略・軍事・食糧（解説）

この報告書は、カデットを中心とするロシア・ナショナル・センタール（内戦初期にモスクワで設立され、自ら「ポリシエヴィキに対する闘争のため、ロシアにおいて形成された地下組織」と規定している。本部は、当時パリ）の文書（手書き）で、「極秘」のラベルが貼られている。無署名で、日付も一九二一年としか記されていないが、二一年一月ないし二月の初めにヴィボルグないしヘルシンキのセンタール通信員によって書かれたことは明らかである。アヴリツチによれば、作成者は元ペトログラード大教授ツェイドレル（当時、ヴィボルグ〔フィンランド〕に亡命、ロシア赤十字同国支部代表）に間違いなさそうだ。

作成者は、明らかにクロンシュタットの状況について詳しく、叛乱を予想して、要塞・砲台等を軍事的に分析し、食糧の準備の必要を力説している。だが、いうまでもなく、センタール通信員の目的は、叛乱を単に援助するのではなく、利用することであった。仏海軍の支持を受けた、ウランゲリ軍の派遣が必要であるとし、ウランゲリ軍がクロンシュタットに到着次第、指揮権は移譲されるべきだ、とされるのである。要するに、この報告書は国際的規模での謀略を提起しているのである。

では、この報告書が、クロンシュタットが白衛軍の陰謀であったことを示す証拠たりえようか？ ポリシエヴィキがこの資料を入手していれば、「反革命」を暴露する格好の材料として利用していたことは想像に難くない。しかしながら、矮小な党派性を前提としない限り、革命的なものであれ反革命的なものであれ、反ポリシエヴィキ的な動きを白衛軍が利用しようとかかるのは当然であり、それ故にクロンシュタットを反革命と断罪することはできないのである。（ポリシエヴィキによる卑劣なレッテル貼りに対する反論は、イダ・メット『クロンシュタット・コミューン』に詳しい）とはいえ、このことを前提としたうえで、ナショナル・センタールの介入に対し叛乱側がどう対処したか、を検討することはあながち無意味ではないだろう。

報告書は、アヴリツチの注が指摘しているように、氷が凍ってから蜂起が起きることを仮定し、然るべき準備を提議しているのだが、叛乱は氷が解ける前に開始され、提起された準備は十分に事前になされてはいなかった。その軍事的分析も、フィンランド湾が氷結し、戦艦が動けない状態では、大きな狂いが生じる。作成者

は、「叛乱のための組織者の緊密なグループが形成され」ており、彼らの連絡がとれていることを示唆しているかのようだが、その存在からしてかなり疑わしいといわねばなるまい。計画的なものであれば、軍事的に絶対に有利な解氷まで待ったであらうし、カリーニンを黙って帰したりしなかっただろう。

もちろん、叛乱が勃発したとたんに、ナショナル・センチターは動きだした。しかし水兵たちは、チェルノフの食糧援助の申し出をはじめ、飢餓で陥落寸前の三月一六日のヴェルケンの訪問と「赤十字」の若干の援助以外、ことごとく拒絶したのである。そればかりか周知のように、彼らは内部の軍専門家によるオラニエンバウム急襲の提案を拒否したのだった。

ここから、いかなる結論を導き出されるのか？ もとより、ここで性急な結論は出せない。結論を下すには長大な論文を必要とするであろう。ただ、私は次のことを付言しておきたい。秘密報告の分析は、主体的側面を除けば、客観的にほぼ正しいものであった。叛乱の敗北は、十分な準備を行わず、氷が解ける前に始まったために、ほとんど不可避的なものであったろう。だが、この分析者は致命的な誤りを犯した。それにもかかわらず、水兵たちは決起したのである。そのことの意味を、我々なりに把握すること抜きに、個々の側面をあげつらってみてもしかたがない、ということである。

(F)

編集後記

不思議なことに、ベルクマン、ヴォーリン以後、アナキストによる本格的なクロンシュタット総括は一つも書かれていない。クロンシュタットはポリシエヴィキ弾劾の根拠とのみみなされ、それを媒介とした運動の深化はほとんどなされなかったのではないか。本号は、クロンシュタットにできる限り具体的、多角的なアプローチを試みた本格的総括論議の呼び水となれば幸いである。ところで、泣事はいたくないが、財政的にまさに存亡の危機である。全面的支援を！

(F)

乱 RAN 9号

1972年2月20日発行

定価 100円 (〒25円)
編集 『乱』編集委員会
発行者 秋山 清
発行所 麦 社

東京都豊島区南池袋1-15-21田中ビル207
tel. (03)987-5765 振替東京 144722

東京都千代田区神田神保町1の52(二九四)二五〇六

三一書房

東京神田
駿河台2

完結 **アナキズム叢書** 全8冊

人間的自由の無制限の拡大と絶対的擁護／すべての権威・権力の
戦闘的否定 本叢書はすべて原文より訳出し本邦初訳多数収録。

バクーニン I

国家と無政府 神と国家 他
勝田吉太郎解説・訳 ●850円

バクーニン II

告白 連合主義・社会主義および反神
学主義 内海周平解説・訳 ●830円

クロポトキン I

叛逆者のことば 相互扶助論
大沢正道解説・訳 ●1500円

クロポトキン II

パンの略取 田園・工場・仕事場
大沢正道解説・訳 ●1500円

プルドン I

19世紀における革命の一般理念
陸井四郎解説・訳 ●1300円

プルドン II

労働者階級の政治的能力
三浦精一解説・訳 ●1500円

プルドン III

所有とは何か 連合の原理
長谷川進解説・訳 ●1500円

ネ ッ ト ラ ウ

アナキズム小史
上杉聰彦解説・訳 ●1200円